



金沢区工業学校兼六回校舎 (現在の瓢池付近)

石川の近世・近代を彩った偉人・俊傑・奇人

②

工業教育の父 納富 介次郎

のうとみ かいじろう

金沢で日本初の工業学校を創立し、
全国に工業学校を誕生させていく熱意とは

石川県立工業高等学校
ギヤラリー運営委員

濱岸 勝義

「工業教育の父」納富介次郎の歩みを見ていきたい。

■ 納富介次郎の生い立ち

納富介次郎は天保十五年（一八四四）四月三日、九州の小京都といわれる現在の佐賀県小城市小城市町に、小城藩の皇学家であった柴田花守、母フチの次男として生まれた。小城町史によると「花守は

明治に入り工芸品の技術指導のため、石川県は農商務省の巡回指導技師、納富介次郎を一度にわたり招いている。それが縁で介次郎は日本初の工業学校である金沢区工業学校（現石川県立工業高等学校）を明治二十年（一八八七）七月に兼六園内に創立して初代校長となり、現富山県立高岡工業高等学校、香川県立高松工業高等学校の初代校長も務めている。



上海へ渡る前の介次郎

三十七歳の時に画論『画学南北弁』（上・下）を著わし、当時の画学に新風を吹き込んだ」とある。その父から書画詩歌、皇典などを学び、わずか八才で介掌と号し、十六歳のとき佐賀藩士で儒家の納富六郎左衛門の養嗣子となった。

文久二年（一八六二）、十九歳の時、介次郎は佐賀藩王鍋島直正に認められ、幕府の艦船「千歳丸」の最年少従者として同藩士の中半田倉之助や長州の高杉晋作らと共に上海へ渡る。この渡航は国際市場の現状調査を目的とした幕府の数少ない積極策の一つである。上陸して、介次郎は儒学の聖地とは程遠

い上海の状況を目の当たりにする。アロー戦争に敗れて半植民地化された中国の美態や、上海租界の繁栄と庶民の貧しさの格差であった。一行は海防への強い危機感と中国への軽蔑感などを抱き、高杉も不衛生さを嘆いている。二ヶ月間の滞在中にコレラで水夫三名を喪い、介次郎も帰国の船中で病に犯され生死をさまよった。この苦難の渡航は、「富国の道は貿易にあり」という思想行動の基を築き上げ、介次郎は日本が早急に執るべき策を報告書にまとめ、対応すべき国策についての意見書まで添えて復命した。しかし、これが通俗な藩庁役人の反感を買い報告書は日の目を見なかった。

渡航先で病んだ体は直ぐには完治せず、慶応四年頃には長崎で療養していたようで、この頃に妻となる森山静子と知り合ったと思われる。その後、大阪に出て佐賀藩設商會に身を置き、明治二年に再び上海に渡った。海産物や雑貨などを持ち込み多くの利益を上げて帰国する。今回は「原料の交易は国を問わず資本力さえあれば誰でもできる。美術工芸品など日本人の得意とする分野で、その商品に独自性を